

## 〈意見〉

小林 隆児\*

### 拙著『関係からみた発達障碍』に対する滝川氏の書評を読んで

児童青年精神医学とその近接領域 53(5):649-651 (2012)

滝川氏は、本誌の53巻1号(滝川, 2012)で拙著『関係からみた発達障碍』(小林, 2010a)に対する書評を論じている。そこで拙著の中でキーワードとなっている「アンビヴァレンス」について、以下のような率直な感想を寄せている。

「著者のキーワード「アンビヴァレンス」に対して、プロイラーやフロイトのアンビヴァレンスは同じ対象に対して同時に相反した感情や意志や認識が生じるという個体の内的な心理機制を指す概念である。しかし、著者がここで使う「アンビヴァレンス」はそれとはちがう。相手との関係を求めて近づきたい欲求はありながら、いざ近づこうとしたり相手が近づいてくると関係への欲求が満たされる前に不安や緊張のほうが高まって欲求の充足が阻まれるという独特な「関係」のあり方を指す概念と思われる」と。

筆者は当初からそのことについて自分でも気づいてはいた。「よくわかる自閉症」(小林, 2008)執筆当時、筆者はこのような関係の特徴をいかなる概念で表現すればよいか、かなり思索を巡らしたことを記憶している。このような関係の特徴自体を説明概念で記述することはよいとしても、この中で子ども自身が内的にどのような心理的体験をしているのか、そのことを確かめる術をもたないことからくる戸惑いであった。子どもの気持ちに沿ってみると、「甘え

たくても甘えられない」という「甘えのアンビヴァレンス」としか表現しようがないというのが当時の偽らざる心境であった。しかし、今回の氏の指摘によって、筆者は改めてこの差異について思索することを余儀なくされた。実は、筆者は「アンビヴァレンス」に限らず、これまで精神医学の中で産み出されてきた数々の専門用語とされる概念について、関係発達臨床の試みの中で改めて検討し直すと、次々に疑問が生じるという体験を積み重ねてきた。それは何かといえば、旧来の専門用語は「個」に帰属する心理機制あるいは心理特性として生み出されているが、それらを「関係」の中で捉え直してみると、これまでの理解が悉く覆り、「個」の問題というよりも「関係」の問題として捉え直す必要性に迫られることを痛感するようになったからである。つまり、MIU(母子ユニット)での臨床実践で培ってきた「関係をみる」ということは、旧来の「個」をみることは根本から異なった体験であることを痛感したのだ。そのことから氏の指摘を改めて考えてみると、「個」の心理機制として概念提起された「アンビヴァレンス」の発達の起源を辿ると、筆者が取り上げた関係の特徴としての「アンビヴァレンス」に行き着くのではないかということに思い至ったのである。この「アンビヴァレンス」の問題に限らず、MIUで対象とした自閉症スペクトラム障碍に特徴とされてきたさまざまな症候学的概念についても見直しをする必要性を強く感じてきた。その中で三大症候とされてきたものについてはすでに拙著『よくわかる自閉症』(小林, 2008)で論じたことがある。

\*西南学院大学人間科学部社会福祉学科  
〒814-8511 福岡市早良区西新6-2-92  
e-mail: BYJ04712@nifty.com  
2012年4月15日受稿、2012年5月20日受理

そもそも人間の精神発達には、乳児期を見れば明らかなように、子ども単独で存在しえない。かならず子ども一養育者という一組のユニットとしてとらえなければならない。今や間主観性、情動コミュニケーション、情動調律などの用語が、乳幼児期の発達心理学、発達臨床領域では必須の概念として定着しているが、これらはすべて「関係」そのものをみることの重要性を示している。つまり、発達という現象は「関係」から出発して理解していくことが本来の考え方なのだというのである。

今日の発達障害ブームは、大人中心の精神病理学を中心にして構築されてきた精神医学の旧来の考え方に大きな変革をもたらそうとしているといわれているが、そのことはけっして幼少期からの発達経過を丹念に辿ることの重要性を訴えているだけではなく、「個」中心に作られてきた精神病理学的諸概念を「関係」という枠組みの中で再構築することが求められているほどまでの変革を意味していると筆者には思われるのだ。したがって、児童精神医学が今目指すべき課題は、昨今の発達障害ブームにあるようなコミュニケーションに歪みを見て取る事例に対して、何でも発達障害なるラベリングを貼るような作業ではなく、症候学的な特徴が発達過程でどのようにして生まれてきたものか、本来の意味での成因論的な思索の中で、発達の観点からの治療的試みを生み出していくことであると思うのだ(小林, 2012b)。

人間は各自「個」としての多様な感情や欲求、さらには意思、思考、認識などを有しているが、そのような諸々の精神機能は、発達論的にいえば、「関係」の中で体験され、「個」の中に蓄積され、次第に「個」自身に内在化することによって表に現れてくるものである。このように考えていくと、旧来の「個」にみられる多様な精神(病理)現象は、その起源を辿れば、「関係」の問題に端を発していることがわかる。冒頭に挙げた氏の指摘は、いみじくもそのことを的確に指摘していると思われるのだ。

さらに強調しておきたいことがある。「関係

をみる」とはどういうことかについてである。ともすれば、「関係をみる」とは、これまでさかんに取り上げられてきたような、母子関係などの二者関係を行動次元で客観的に冷めた目で観察することかと思われるかもしれない。しかし、筆者はそのようなことを指摘しているのではないのだ。「関係をみる」ということは、二者間に立ち上がる間主観的なものを鋭敏に感じ取り、その意味的理解を図ることなのだ。このような臨床的営みを可能にするには、治療者自ら母子関係の中に身を挺して関わるのが求められる。そうして初めて治療者自らその場で生まれているものを感じ取ることができる。そして、その意味的理解を深めていくためには、治療者自らの歴史を通して初めて可能になるような性質のものだというのである。このことについて、「甘え」理論を提唱した土居健郎(2009, p.123)は以下のような指摘を行っている。

「……同一化できるということは「甘え」を知っているということでもある。治療者は自分の「甘え」がわかっていることで患者の「甘え」を、たとえそれが単なるほのめかしであっても、患者自身はそれを自覚できないでいる場合もキャッチすることができる。大体「甘え」というものが本来無自覚なのだ。もちろん同一化も同じことである。治療者はしかしそれが自覚できるのでなくてはならない。無自覚で始まっている「甘え」にせよ同一化にせよ、それを萌芽の状態ととらえることが肝要である。それでこそ本当の治療者である。かくして初めて重い病理の患者も治療関係に入ることができるのではないか。」

最後に、氏が著者につきつけている課題に答えることで本稿を終えようと思う。

「私たちは関係によって支えられつつ、一方、そのはらむ対立・矛盾によって揺るがされる。著者のいう「アンビヴァレンス」とは、そうした対立・矛盾の一つのあり方と考えられる。ただ、私たちの心的世界を生み出し、同時にその失調も生み出す関係の対立性・矛盾性は、「アンビヴァレンス」(だけ)に尽きるだろうか。

著者の「関係発達臨床」が精神障害全域、いや精神現象全域へと視野をひろげてゆくに連れ、この問いにであうのではなからうか」との氏の指摘である。

このことについて筆者は最近、土居健郎が生み出した「甘え」理論を「関係発達臨床」の視点から再照射することによって、「甘え」理論の再評価を試みている。このことは、先に述べた従来の「個」から出発した精神病理学領域の諸概念を「関係」の視点から再構築していこうとする試みの一端でもある。なぜなら、土居の「甘え」理論は成人患者自身の中に「甘え」のアンビヴァレンスを発見し、それが人間関係の成立の原初段階での問題であることから、そのことに焦点を当てることによって、多様な精神病理の理解が可能になることを発見したものである。筆者は「甘え」理論を「関係」を通して見直すことによって、新たに見えてくるものをすでにいくつかの知見として稿を纏めてきた(小林, 2010b, 2011, 2012a)。これらの作業は氏が筆者に与えた課題に対するひとつの答えといえるかもしれない。氏の指摘する通り、「関係」を通して精神障害、精神病理現象を見直すことは、発達障害に限らず精神医学の諸概念の脱構築に繋がることを痛感している。課題のハードルはあまりにも高いが、これからも筆者なりのささやかな挑戦を続けて行きたいと思う。

昨今の書評が著書の目次の型通りの紹介にはじまり、各章の内容を概観した後、賛辞とともに必読の書であると結ばれているものの多い中

で、滝川氏の拙著に対する書評は、著者の主張の中核となる問題に対して、率直で的を射た感想と疑問を述べていることで、筆者は身の引き締まる思いを抱くとともに、自らの考えをさらに深く思索するきっかけを与えてくれた。このことに、真摯なる感謝のこぼれを申し述べたいと思う。本来あるべき書評を拙著に対して寄せてくれた氏の慧眼に改めて脱帽する次第である。

## 文 献

- 土居健郎 (2009) : 臨床精神医学の方法. 東京, 岩崎学術出版社.
- 小林隆児 (2008) : よくわかる自閉症—「関係発達」からのアプローチ. 東京, 法研.
- 小林隆児 (2010a) : 関係からみた発達障害. 東京, 金剛出版.
- 小林隆児 (2010b) : メタファーと精神療法. 精神療法, 36, 517-526.
- 小林隆児 (2011) : 関係からみた「勤と勤練りと妄想」(土居健郎). 精神療法, 37, 327-336.
- 小林隆児 (2012a) : 「甘え」(土居)と“vitality affects” (Stern) — 「甘え」理論はなぜ批判や誤解を生みやすいか. 精神分析研究, 56, 134-144.
- 小林隆児 (2012b) : 発達障害の早期診断と早期療育に潜む陥穽—なぜ障害を「個」に見出そうとするのか—. そだちの科学, 18, 50-54.
- 滝川一廣 (2012) : 書評. 小林隆児著『関係からみた発達障害』. 児童青年精神医学とその近接領域, 53, 71-73.